

日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 地方会ニュース編集事務局

〒 470-11

愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98

藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教

室内 電話 (0562) 93-2453

FAX (0562) 93-3079

発行責任者 竹内康浩・島 正吾

(題字 皿井 進筆)



ーメインシンポジウムー

21世紀にむけての労働者の健康問題 (名古屋国際会議場センチュリーホール)

第68回日本産業衛生学会を終って

私は見た、清新なエネルギーの胎動と輝ける明日への躍進を

日本産業衛生学会理事長 島 正 吾



第68回学会は、名古屋大学竹内康浩教授の許で、主に東海地方会の若手研究者の斬新な発想と、卓抜した実行力を集結して、誠に充実した内容をもって開催されました。

本学会は、名古屋国際会議場において行われ、学会第1日から各会場は立錫の余地がないほど盛況でありました。一般

演題と19題に及ぶ特別報告、ポスターセッション、シンポジウムなど、いずれも今日の産業衛生学の最先端に行く、秀れた研究成果が発表されました。

また第2日夜の会員懇親会も学会員に溢れ、企画運営委員会のすばらしい感性と心意気のなかで、晩春の一時がひととき輝いてみえました。

思えばこの一年間、様々な困難を克服して、学会を見事に成功させられた、ご関係の皆様のご苦労に対して、心からなる感謝と賛辞を贈るものであります。

さて今日、社団法人日本産業衛生学会は、学会員6,200余名を擁するマンモス学会に成長し、その影響は産業分野ばかりでなく、地

域社会全体にまで波及しております。それだけに改めて、学会活動への期待の大きさと、負うべき責務の重大さを痛感いたします。

ところで、平成7年度以降、本学会が当面する課題としては、

- ①学会組織ならびに運営の抜本的な見直し
- ②各種委員会、研究会活動の充実と活性化への努力
- ③国際学术交流に対する具体的な働きかけ
- ④若手研究者の育成と研究活動の奨励
- ⑤学会事務局機能の充実など

以上のほかにも早急に解決さるべき課題は枚挙に暇がありません。

そしてさらに、これらを円滑に実践するためには、学会活動のエネルギー源とも言うべき、学会予算の編成・運用について、学会員はひとしく重大な関心と、地道な努力を忘れてはなりません。

しかし一方、過去68年間という本学会の長い歴史と、伝統の狭間において、多数の学会員の意志を尊重しながら、何かを「変える」ということの難しさは、考えるほど容易なことではありません。そして学会が「よりよく変わる」ためには、学会員のさらなる「勇気」と「決断」が、つよく期待されるものであります。

ここに第68回学会の成功を機会にして、重ねて学会員の皆様、ますますのご支援、ご協力を心から祈念いたします。

特 集 第68回日本産業衛生学会を主催して



第68回日本産業衛生学会は学会1970余名、懇親会450余名、特別研修会880余名の参加をえて大変盛会でした。学会の目的は研究、研修、懇親にあります。第1は会員の日頃の研鑽による優れた研究成果の発表にあります。今回は461題の

発表があり、積極的な討論がおこなわれました。また、参加者の研修も重要で、特別講演2題、メインシンポジウム1題、シンポジウム4題、特別報告19題を企画いたしました。いずれの会場も盛況でした。特別研修会も時宜に適した講演5題が行われ、最後まで盛況でした。

学会開催までのこの1年間は、企画運営委員会で、鋭意準備をして参りました。井谷学術企画部長を中心に学会の内容やプログラムは何回も検討され、その成果としてよい企画ができ、参加者も多く、好評でした。ポスター発表は93題がえられ、多数の参加者による活

第68回日本産業衛生学会企画運営委員長 竹内 康 浩

発な討論が行われて所期の目的が達せられたものと慶んでおります。山田総務財政部長を中心に準備した懇親会は東海地方の特色をだしたユニークな企画で、参加者に十分満足していただけたものと思います。東海名産品コーナーは特に好評でした。五藤事業企画部長を中心に、教育資料委員会の援助をえて、特別研修会も緻密な準備を行い、優れた内容の講演と多くの参加者をえて、大きな成果を上げました。また、吉田広報部長を中心に、地方会ニュースの学会特集号を発行し、学会の宣伝と参加者の増加に大いに貢献しました。さらに、柴田事務局長を中心とした事務局の奮闘によって、企画運営委員会の連携プレイが機能し、東海地方会の力量が十分発揮されました。当日の運営については企画運営委員会、愛知県産業医懇談会、衛生管理業務女子研究会の方々のご尽力により予想を超えたスムーズな運営ができました。今回の学会を成功裡に終えることができたことは、島理事長の適切なご指導、その他の沢山の方々のご助力によるものであり、衷心より感謝申し上げます。

第68回 日本産業衛生学会プログラム

日時：平成 7 年 4 月 26 日（水）～29 日（土）

場所：名古屋国際会議場

主な行事日程及び内容

4 月 26 日（水）

9:00～10:00 評議員会

10:00～12:00 シンポジウム 1 座長：清水 善男（三菱電気）

「産業保健活動とプライバシー」

演者：浜島信之（愛知県がんセンター疫学）

大林雅之（産医大・医学概論）

鎌田 隆（本田技研浜松健康管理センター）

川辺ヒロ子（日本 I B M）

13:00～14:00 ポスター発表の質疑・討論

14:00～16:00 シンポジウム 2 座長：中明 賢二（麻布大・環境保健）

「作業環境につながる作業環境評価」

演者：山田誠二（松下産衛科学センター）

名古屋俊士（早大・理工）

中屋重直（岩手医大・衛公衛）

友国勝廣（佐賀医大・地域保健）

4 月 27 日（木）

9:00～11:00 シンポジウム 3 座長：夏目 誠（大阪府立こころの健康総合センター）

「労働現場を中心としたストレス対策」

演者：原谷隆史（産医研）

川上憲人（岐大・医・公衛）

藤垣裕子（東大・教養）

飯田英男（健康管理コンサルタント）

11:00～12:00 総会

13:00～14:00 奨励賞受賞講演

「産業化学物質の曝露評価に関する研究」

座長：原田 章（関西労働技術健康センター）

演者：坂井 公（東京労災病院健康センター）

「混合有機溶剤作業における労働衛生管理用器具の開発研究」

座長：池田正之（京大・医・衛生）

演者：保利 一（産医大・産生研労働衛生工学）

14:00～16:00 特別講演

「産業保健の国際動向 - 21世紀を展望して -」

座長：岩田弘敏（岐大・医・衛生）

演者：小木和孝（労働科学研究所）

「分子遺伝学の最近の進歩と産業衛生学 - 環境因子による発がんの機構を中心として -」

座長：竹内康浩（名大・医・衛生）

演者：吉田松年（名大・医・病態研）

16:00～18:00 メインシンポジウム

「21世紀に向けての労働者の健康問題 - 作業関連疾患の視点から -」

座長：島 正吾（藤田保衛大・医・公衛）

井谷 徹（名市大・医・衛生）

演者：高田 昂（中災防労働衛生検査センター）

和田 功（東大・医・衛生）

野田一雄（竹中工務店）

中村健一（昭和大・医・衛生）

指定発言：青山英康（岡大・医・衛生）

和田晴美（名古屋鉄道）

堀忠洋一（三和銀行）

上畑鉄之丞（国立公衆衛生院・疫学）

18:00～12:00 懇親会

4 月 28 日（金）

10:00～12:00 シンポジウム 4 座長：佐藤 洋（東北大・医・衛生）

「小規模事業所の産業保健活動をめぐって - だれがイニシアティブをとるべきか -」

演者：広瀬俊雄（仙台錦町・産業医学健康センター）

馬場快彦（福岡産業保健推進センター）

服部於彦（愛知県医師会）

加藤保夫（岐阜県産業保健センター）

13:00～14:00 ポスター発表の質疑・討論

14:00～16:00 地域交流集会

一般演題（合計 461題）

（ポスター発表 93題、口頭発表 368題）

特別報告 19題

4 月 29 日（土）特別研修会＜職場における健康保持増進の今日的課題＞

10:10～11:10 「国際化と感染症対策」

座長：加藤 英彦（愛知県医師会）

講師：磯村 思无（名大・医・医動物）

11:10～12:10 「ライフスタイルからみた成人病予防」

座長：岩井 淳（全日本労働福祉協会）

講師：豊川 裕之（東邦大・医・公衛）

13:00～14:00 「健康保持増進と運動・休養」

座長：荻田 佳子（東海銀行）

講師：太田 壽城（国立健康栄養研究所）

14:00～15:00 「騒音障害防止のためのガイドラインと聴力障害予防」

座長：岩田 弘敏（岐阜大・医・衛生）

講師：伊藤 昭好（労研）

15:00～16:00 「最近における精神疾患の変容とメンタルヘルス」

座長：祖父江逸郎（愛知医科大学長）

講師：笠原 嘉（藤田保衛大・医・精神医学）

特別講演 1

産業保健の国際動向－21世紀を展望して－



平成 7 年 4 月 27 日(木)にセンチュリーホールで小木和孝先生(労働科学研究所)が「産業保健の国際動向－21世紀を展望して－」と題して特別講演された。産業保健分野の国際動向と関連して、(a)職場ごとの自主対応を促すアプローチとそれを反映したILO条約・勧

告などの国際基準(この自主対応を中心としたアプローチは、使用者責任を明確化して、労働者の参加の権利も保証し、その責任をばたす自主改善を重んじる。法規で責任の所在を定めたら、細かい技術指針は指導や協力体制をつうじて実現する。職業保健チームは、あくまで労使自身の予防措置としてのリスク評価と対策を支援する立場である。)、(b)対策指向の多面リスク評価(使用者責任で行うリスク評価は、作業関連の複合リスクを幅広く取り上げながらすぐ対策を実施する目的で実際的な方法ですすめていく必要がある。保健スタッフの専門機能を生かせる環境測定や健康診断結果は、そのリスク評価の一部の情報源にあたる。)、(c)参加型実践活動のサポート(職業保健チームに期待されているのは、参加による複合リスク評価・対策実施に対するリアルタイムな助言者の役割である。)、(d)アジア地域の協力の推進(これからの国際協力では、お互いの経験から共に学ぶ態度で、産業保健活動の実践的なサポートに焦点を合わせていく必要がある。)、の 4 点が、特に注目されるという示唆に富んだ興味深い講演であった。

報告: 井奈波 良 一(岐大・医・衛生)



小木 和孝先生



特別講演 2

分子遺伝学の最近の進歩と産業衛生学



最近の分子遺伝学の進歩は著しいものがある。今回、遺伝子研究での第一人者である吉田松年先生から直接この講演を拝聴でき、私自身にとっても大変有意義なことであった。先生は講演で現在の発がん理論というものを中心に、最新の知見もふまえ、わかりやすく

解説され、その要約は以下の通りである。

発がん物質の標的は遺伝子のDNAであり、発がん物質は体細胞のDNAを変化させる突然変異原である。そして発がん要因としては化学物質を始め放射線や活性酸素も含めその基本過程はDNA損傷とそれに起因する突然変異である。がん細胞中でがん形質を示すために必要な変異を示す遺伝子をがん遺伝子と呼び、またがん遺伝子と殆ど同じ遺伝子の一群が正常のヒト細胞中にも存在し、これらはプロトがん遺伝子と呼ばれる。がん遺伝子是一对のプロトがん遺伝子のうちのどちらかが変異すればがん形質を示す優性のものばかりであるが、これに対して劣性のがん遺伝子つまりがん抑制遺伝子が新たに見いだされた。

以上、環境因子による発がんの機構を遺伝子レベルで解説され、産業衛生に携わる我々の今後の方向性を考える上において示唆に与む講演であった。

報告: 長 岡 芳(藤田保衛大・医・公衛)



吉田 松年先生



メイン・シンポジウム

21世紀に向けての労働者の健康問題
ー作業関連疾患の視点からー

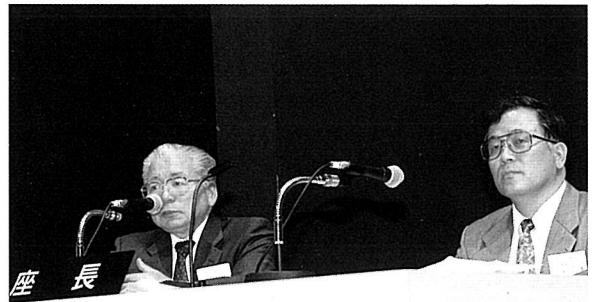
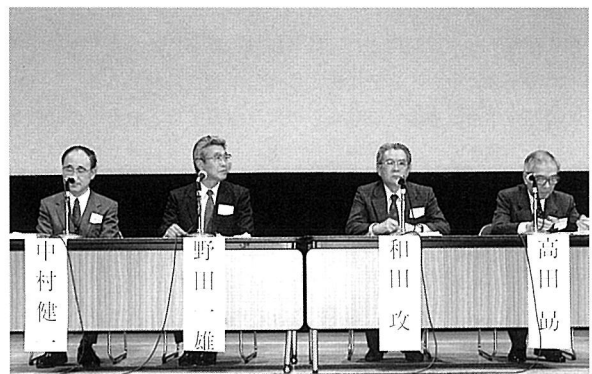
報告：宮 尾 克（名大・医・公衛）



標記のシンポは井谷 徹教授（名市大）と島 正吾教授（藤田保健大）の司会で行われた。はじめに司会から、作業関連疾患の概念とその重要性について解説があり、このシンポが対策に焦点を当てている旨の報告があった。高田 島先生（中災防）は、労働環境の変容と労働者の健康問題を、労働省が実施している施策・研究を中心にしながら報告された。和田 功教授（東大）は、中高年に焦点を当てて、高齢化と作業関連疾患を述べられた。「ある一定の能力のもとに、社会的かつ経済的に生産的な生活ができる状態」を新しい健康観として提唱され、個人の能力・体力に合った適正配置が重要であるというまとめを行った。野田一雄先生（竹中工務店）は、前任の日本航空における腰痛対策の総合的展開を実例にして、静的な作業やメンタル面も含めた対策の必要性を強調された。中村健一教授（昭和大）は、全産研のデータをもとにして、成人病対策を作業関連疾患としてどう進めるべきかについて報告し、最近のくも膜下出血の増加について警鐘を打たれた。

これらのシンポジストの報告に、指定発言の埋忠洋一先生（三和銀行）は、健康に及ぼす企業と家庭の日本の特殊性の問題点について具体例を上げられ克服を呼びかけられた。指定発言の青山英康教授（岡山大）は、作業関連疾患の概念が、発症要因でなく予防対策に中心的な価値観を置いたものとして、どの対策がどういう効果を生むかを検討すべきと述べられた。指定発言の和田晴美先生（名鉄）は、保健婦の立場から、成人病の一次予防の重要性を強調し、二次予防の中では本人のQWL（働きがい）を尊重した保健指導であるべきである。出前の仲立ちのような保健指導であってはならず、現場へ出ることを呼びかけられた。指定発言の上畑鉄之丞先生（国立公衆衛生院・疫学）は、学会の委員会報告を解説しつつ、循環器疾患の予防対策について、健康管理の発想の転換、労働条件への発言、ハイリスク者への個人対応、多要因の労災補償制度、コストベネフィットを考えた健康管理について述べられた。会場から、VDTの電磁場や神戸の震災現場の石綿等についての質疑のあと、館 正知先生がシンポのねらいが散漫になってはならない、作業者をとりまく環境全体に目を向けて欲しいと指摘された。

テーマが大変大きいだけに、時間はいくらあっても足りない様子だったが、対策志向の概念である作業関連疾患を、丸ごと料理するには、現場と一体になった取り組みが今一步望まれる。指定発言を含めフロアーから元気で率直な発言が多く出されたことが、印象的であった。

座長 島 正吾先生
井谷 徹先生

埋忠 洋一先生



青山 英康先生



和田 晴美先生



上畑鉄之丞先生

シンポジウム 1

産業保健とプライバシー

報告：小 西 泰 元（NTT鈴鹿）



本シンポジウムの表題は本学会では、初めて取り上げられたもので、三菱電機の清水善男先生の座長のもとに開催された。演者は医療倫理専門家の浜島、大林、専属産業界の鎌田、臨床心理士の川辺の各先生方で、浜島先生は、基本的人権、プライバシー権、健康管理に関する企業者の責務、健康管理の担当者

の職務、就労者の責務、権利・義務の衝突、を主に法律の面から、大林先生は、「バイオエシックス」・日本語訳「生命倫理学」と産業保健との関わり、健康診断に関するインフォームド・コンセプトの問題について、鎌田先生は、事業者、労働者の両方に関わりを持った日常産業医業務の中で、プライバシーの問題をどう考えるか、健

康診断の事後措置等の実例をもとに、川辺先生は、日常的なメンタル・ヘルス・ケアの実践の中で、プライバシーの問題を現場の体験を中心とした等の講演であった。討論で産業界大久保教授より、倫理の実践の場で、きれいな事を並べるより、困った時に相談できる委員会等の設置を考える必要もある、との発言等もあった。最後に座長から、「我々が専門家として、今後労働者の安全健康を守り、企業の発展を願う場合、諸外国のプライバシー権をそのままストレートに持って来るのではなく、我々の価値観とのバランス感覚の上に立って、調整、整理し、働く人たちの人権が尊重されるような職場を作り上げて行きましょう」とのまとめの発言があり、プライバシー権の認識を新たに、盛会のうちに閉会した。

シンポジウム 2

作業環境改善につながる作業環境評価



作業環境測定の評価は、実際の現場の改善に生かされているのだろうか。

3 管理の有機的な連携を具体的に示された山田先生、測定士に対して、その役割の重要性を喚起された名古屋先生、中小企業の改善事例を発表された中屋先生、そして、生物学的モニタリング値の評価手法を新提案された友国先生、どの先生方も、現状の問題を提起している。

測定結果の評価が悪い時は、必ず原因があり、対策を実施すれば環境は良くなるはずである。しかし、現場では旧態依然として悪環境で作業が行われる場合がある。

資金・技術・認識・意欲・体制等複数の要因が絡み合い、改善の道を妨げる事が多い。私は測定士でもあるが自分の出した評価で、

報告：土 屋 眞知子（静岡県産業環境センター）

どれ程の説得が出来ているかは確かに不安が残る。すべての現場とは言わないが、対策が出来ない理由を聞く機会は多いのである。

しかし、評価基準が定められてからは測定結果の評価の認識はかなり浸透したと思う。第 3 管理区分に困惑する表情を見せる担当者は数多い。私達以上に、改善の必要性は感じているのかもしれない。その意味では、生物学的モニタリング値の評価基準に、効果を期待したい。

シンポジウムは、200 名近い参加者があり、質問者も多く活発に意見交換がなされた。コンサルタントとしてもより一層研鑽に努め、一つでも多くの現場で環境改善が進むよう指導してゆきたいと思う。有意義なシンポジウムに参加出来た事をうれしく思い、この企画にお骨折り下さった方々に深く感謝申し上げたい。

シンポジウム 3

労働現場を中心としたストレス対策



第 68 回日本産業衛生学会・シンポジウム 3 「労働現場を中心としたストレス対策」に参加させていただきました。

職場のストレス対策が「欧米でどう取り組まれているか」について、特に私が関心を持ったのは、EAP（ストレス反応を示した従業員援助プログラム）を企業が導入し、大きな経済効果をみた例です。EAP の目的として従業員の福利厚生・労使関係改善・企業の社会貢献までも含まれ、中広い援助活動を感じました。またフロアから「ストレス対策について企業トップに関心をもってもらうには？」「ストレス対策を進めるには現場と医療機関の連携を、具体的にど

報告：野 村 富久恵（豊田自動織機）

う進めたらよいか」「産業医学の手法については、全体をみるには良い手法であるし、評価についてもよい手法だと思う。ただ個人の問題に対する対応の仕方については、まだ欠けている部分があるのではないかと。また問題を気楽に相談できるシステム（病気になる前の段階で）をつくる必要があるのではないかと、具体的な意見も聞かれ、会場の雰囲気も盛り上がりました。

司会の夏目先生も「まとめ」でストレス対策が重要だと言われながら決定的方法がない今、EAP が日本で根づくかどうかとも未知の段階のため、まず現状のストレス対策を、辛抱強く職場に定着させていくことが重要だ、と述べられました。そのためには、直接現場にいる産業保健チームへの期待が大きいことを実感しました。

シンポジウム 4

小規模事務所の産業保健活動をめぐって

ーだれがイニシアティブをとるべきかー



イニシアティブをとるべき候補者と目される立場からそれぞれシンポジストが登壇されました。

広瀬先生からは作業環境面での改善事例など具体的な提示があり、小・零細事業所の場合、まだまだ典型的な曝露形態もみられ、介入さえできればかなり劇的に改善できることが実感されました。

また加藤先生は企業外健診機関の立場から零細事業所にもよく対応されている旨報告され、感心いたしました。しかし事後指導などには限界も感じておられるようで、その点、産業保健センターへの期待を述べられましたが、小生も同感であります。

報告：松 田 元（松下電工四日市）

小規模事業所に対しては、設立の趣旨から、産業保健センターに大きな期待がかかります。しかし（失礼ですが）まだあまり周知徹底されていない感もあります。今回、馬場先生に総論的に教えいただきましたが、次回は具体的事例を交えて活動状況をうかがいたいと思います。これは地域に密着して頑張っておられる医師会に対しても同様であります。

法制度上の改革も望まれるが、さしあたって特効薬的対策はないのだから地域の情勢に応じてそれぞれがうまく連携し地道に活動していくべきであること、小規模事業所に対しては規制していただくだけでなく指導が重要であることが結論づけられたと解釈しています。



奨励賞受賞講演



報告：酒 井 潔（名古屋市衛研）

東京労災病院の坂井公先生が「産業化学物質の曝露評価に関する研究」、産業医科大学の保利一先生が「混合有機溶剤作業における労働衛生管理用器具の開発研究」という演題で、今回受賞対象となった研究の経過とその成果を30分ずつ講演されました。坂井先生は

尿や血液などに含まれる化学物質やその代謝物を測定する生物学的モニタリングの中で鉛や有機溶剤での生化学的指標（ALA-D活性や尿中代謝物など）を具体例としてその検査法の開発と実用例について、保利先生は有機溶剤標準ガスの発生装置の開発での試行錯誤の実例や活性炭捕集管での有機溶剤の吸着特性に関して吸着現象とそのメカニズムについて、簡潔にまとめられていました。両先生の講演を聴いて、将来を見通した研究課題の設定とその課題を20年近くにわたって追求し続けてきたという共通点があるのではないかと感じるとともに、お二人の半生の一部を垣間見たような気がしました。



坂井 公先生



保利 一先生

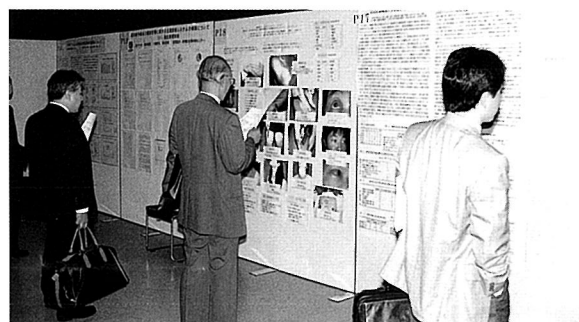
ポスターセッション



報告：城 憲 秀（名古屋市・医・衛生）

今回の産業衛生学会では、新しい試みとしてポスターセッションが実施された。ポスターには「作製の手間がかかる」、「口頭発表に比べ拘束時間が長い」などの欠点はあるものの、「最新の情報を報告できる」、「深い討論ができる」、「視覚的な発表であるの

で内容が理解しやすい」、「多くの発表に接することができる」等の利点も数多くある。国際学会を含め他の多くの学会でポスターが採用されているのは、その利点とするところが大きであるからであろう。今回の学会でも、ポスター発表の長所が遺憾なく発揮されたものと思っている。ポスターセッションの時間には多くの参加者が会場に詰めかけ、発表者と熱心に討論をされていた。私もある質問者から時間が十分にあり、たくさんさんの発表をみることができ嬉しく思っていると話しかけられた。このようにポスター発表が成功した背景には、発表者、参加者の情熱、努力によるところが極めて大きいことは明らかであるが、同時に竹内先生をはじめとして学会運営にご尽力された方々のプランニングの巧みさもまた見逃せないものである。広い会場を利用し、ポスター討論の時間枠をつくり、いろいろな便宜を図るなど成功にむけた種々のアイデアが窺われた。学会が大きくなると、情報をより多くの人に正確に伝え、議論を進めるためにはポスター、ビデオなど新しい発表形式が有効な手段となるものと思う。今後の産業衛生学会における種々の試みを期待したい。



地域交流集会



今回の地域交流集会は、新しい試みとしてシンポジウム形式で4月28日に開催された。

テーマは、「これからの健康診断を考えるー地域産業衛生活動の充実に向けてー」であり、司会を学会副理事長の荏司榮徳先生と連合愛知の服部証氏が担当された。シンポジストとして、筆者、熊谷謙一氏（連合総合労働局部長）、清水善男先生（三菱電気産業医）の順に3名が報告した。今回の企画は井谷先生（名古屋市大衛生）を中心に準備されたが、そこに参加した一員として、筆者は健康診断の目的とその今日的課題について発表し、労働者が職場のストレス要因や産業医の在り方について理解することの重要性を述べた。熊谷氏は健康診断の問題点と将来像と題して、世界的

報告：小 野 雄一郎（名古屋市・医・衛生）

な労働運動における健康問題の位置付けの向上や過労問題への取り組みの在り方等を論じた。清水先生は職場における健康診断一考え方と問題点一との題で、現代の健康問題の特質や、日常生活の在り様を反省する材料としての健康診断の活用、出稼ぎ労働者の健康情報確保を始めとする多様な問題点等を多角的に論じた。会場からも健康診断項目の在り方や、小零細企業での健康診断事後措置の進め方、労組が法律以上に対応を期待されるべき事項等、活発な発言があった。今回、参加者は150名余と見られ、学会関係者、労組ともに近年の状況をはるかに上回った。但し、内容の大きさに比べて交流集会の時間が予測通り不足しており、多くの参加者から十分に意見を聴けなかったのが残念であった。今後、今回の試みが実のある討論を活性化させるための良い前例となることを期待したい。

特 別 研 修 会



当日は約900名の参加をいただき、大変盛大な研修会となった。私も企画を担当する者としては大成功で、まずは参加していただいた諸先生に感謝申し上げたい。またこれほどの参加をいただいたのは、ひとえに講師や座長の先生方の御高名によるものであり、当日も期待どおり有意義な御講演をいただいた。

報告：五 藤 雅 博（旭労災病院）

あらためて講師や座長の先生方に感謝申し上げたい。この研修会は教育・資料委員会との共催で行われたもので、委員会の先生方は準備段階でのアドバイス、当日の受付業務など（偉い先生方に受付をしていただいたのは大変恐縮した）を快く引き受けて下さった。衷心より感謝申し上げる。最後に企画運営委員会ワーキンググループの先生方の献身的なご協力で、無事研修会が終了したことを申し添える。

講 演 1

国際化と感染症対策



特別研修会の「国際化と感染症対策」を聴かせて頂いた。講師の名古屋大学医学部医動物学講座磯村思无教授はガーナ、インド、パキスタン、ベトナムなどの開発途上国における感染症の調査研究に従事されており、その豊富な体験に基づいて具体的に変化が易く感染症対策について述べられた。その内容の詳細は特別研修会資料集にあるので割愛させて頂くが、特にその中でリビアにおけるA型肝炎の発症に関して2社の例を挙げて、A型肝炎が多発し激症化例も出た会社の場合は残業につき残業で仕事

報告：木 下 勝 也（本田技研鈴鹿）

をさせていたが、A型肝炎の発症が少なかった会社の場合は現地のベースに合わせて仕事をさせていたとのことで、睡眠とか栄養といった日常の健康管理が感染症の予防にもつながることを強調された。最近の円高不況の中で海外における業務が強化され短期間の出張においても一定の成果が期待される時代となり海外での日常の健康管理についても産業医として十分関与していく必要性を痛感した。さらに安全、危機管理および交通事故にも言及され日常多くの海外駐在者および出張者を送り出している企業の産業医および健康管理スタッフにとって大いに参考になった講演であった。

講 演 2

ライフスタイルからみた成人病予防



最近工場では諸先輩先生方の努力により職業性疾患はかなり減少してきた為、産業医業務の中で成人病予防の占める割合が増加してきています。成人病とライフスタイルは密接な関係があると言われており、現在成人病を予防するためにライフスタイルを変えるように保健指導を行っています。しかし、例えば重症な成人病に罹患しておりこのままのライフスタイルを続けると明らかに病状を悪化させることが予測できる場合はともかく、成人病を予防する目的のために長年にわたり維持してきたライフスタイル

報告：黒 田 智 寛（東芝愛知）

ルを変えることが成人病を予防できればよいができればただストレスを与えるに過ぎないのではないかという疑問が残ります。これらの疑問を解決するためにはライフスタイルと成人病との関係を理論的に解明していくが必要になるわけですが、ライフスタイルも成人病も漠然とした概念であり特異的な関係を見出す事は困難で研究する上では扱いにくい分野であります。今回の豊川先生の話はライフスタイルを食生活に絞ってはありましたが、これらを研究するにあたり方法論を示していただきました。我々産業医にとってもこれから研究する上でとても参考になったと思います。

講 演 3

健康の保持増進と運動・休養



太田壽城先生（国立健康・栄養研究所、健康増進部長）は、今回の講演の中で、働く人々の健康づくりにおける運動と休養についてその効用・効果を中心として、時々ユーモアをまじえながらわかりやすく解説された。自ら作成された健康モデル図を呈示し、「個人」、「ライフスタイル」、「社会システム」のかかわりの中から、個人がどのようによいライフスタイルを身につけるかが重要であると指摘された。

愛知県総合保健センターでの膨大な調査結果から、運動習慣の改

報告：渡 辺 丈 眞（愛知医大・衛生）

善にともなう健康指標の改善を縦断的な検討により明示され、さらに、成人病予防のための必要な運動量を解説され、レクリエーションレベルでの軽運動の有効性をも示された。

働く人々の疲労・ストレスの実態を報告され、さらに、短期保養セミナーの心理的改善効果についても概説された。最後に、テレビゲーム中の血圧応答に対する運動療法の影響についての海外報告から、運動がストレス・疲労に対して予防効果を持つ可能性を提起され、健康づくりの中での運動と休養のかかわりを強調された。

職域での健康増進に携わる会員にとって示唆に富む講演であった。



磯村 思无先生



豊川 裕之先生



太田 壽城先生

講演 4

騒音障害防止のためのガイドラインと聴力障害予防



私のいる工場（エアコン工場）でも、今年の安全衛生方針に、騒音対策を重点項目に上げ取り組んでいる。今回の講演は、特に参考となる事が多く役に立った。その中で、実際 A 測定と B 測定で管理区分に大きな違いが生ずる理由を言われていた。それは、有機溶剤の管理濃度基準に比べると A 測定値の算出方法に違いがあり、騒音の場合ゆるい評価となっているからである。仮に、有機溶剤と同様に算出すれば、騒音の A 測定の 80dB(A)は、85dB(A)に相当するということである。つまり、A 測定の第一評価

報告：平 貢 秀（東芝富士）

値を、80dB(A)に下げるといいのではないかとということであった。また現在、騒音の特健における有所見者の割合は、約10%弱であり、聴力障害予防のために、平成4年に出された騒音のガイドラインを元に、騒音の労働衛生教育と、騒音対策を進めていかなくてはならないが、具体的でわかりやすく、誰でもやる気がおこり、また効果の上がるような、騒音管理のためのアクションプログラムの策定が重要であると言われた。しかし、それには、現場と会社と作業環境測定士と産業医が一体となって押し進めていかなくてははいけないのである。また、騒音対策の事例集として、「イラスト現場の騒音対策」（オーム社）を上げていた。

講演 5

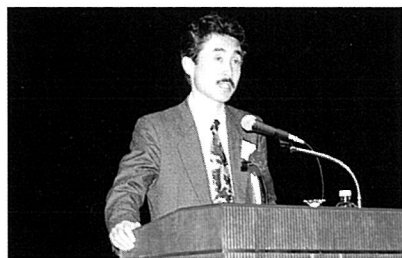
最近における精神疾患の変容とメンタルヘルス



今回、産業看護部会において卒後教育カリキュラム案をめぐる活発な討論がなされ、現場では、人間理解が更に必要であり考慮すべきだという意見が多く出された。労働者をとりまくさまざまな環境、文化の変化の中で人間が変わり労働者の健康問題も変わってきた。メンタルヘルスの問題がどの場面でもでてくる時代となったと思うが、看護職として労働者に対してどのように接近していったら良いのか日々感じている事である。

報告：稲 垣 通 子（J R 東海静岡）

笠原先生には、病気という観点からメンタルヘルスの問題をほり下げていただいた。全ての病気のうちでも精神疾患の軽症化が顕著である事、躁鬱病が気分障害と変わった事、軽症気分障害がますます職場におけるメンタルヘルス対策の中心になってくる事やその特徴、対処方法、職場復帰時の支援方法など具体的に教えていただいた。“人間は理由もなくうつ病になる”人間を理解する上で印象深い言葉でした。講義を聞きながら私は現場で実際に起こっているさまざまな状況を思い浮かべ、今後カウンセリングの“若干の経験のある保健婦”をめざし、産業医、選任の精神科医と連携がもてる日がくる事を願い、日々の業務に励んで行きたいと思った。



伊藤 昭好先生



笠原 嘉先生



懇 親 会



懇親会は27日に約500名の参加者を得て国際会議場内の白鳥ホールで催された。オープニングはシンガーソングライター【明日香】さんの演奏。彼女による『花ぬすびと（世界歌謡祭グランプリ受賞曲）』や『長良川』は、東海の豊かな自然をイメージさせた。小野先生の司会で、企画運営委員長の竹内先生と島理事長が挨拶。引き続き来賓の愛知県医師会副会長加藤英彦先生、館正知先生（元岐大学長）の祝辞。井上俊先生（名古屋名誉教授）の

報告：山 田 琢 之（愛知医大産業保健科学センター）

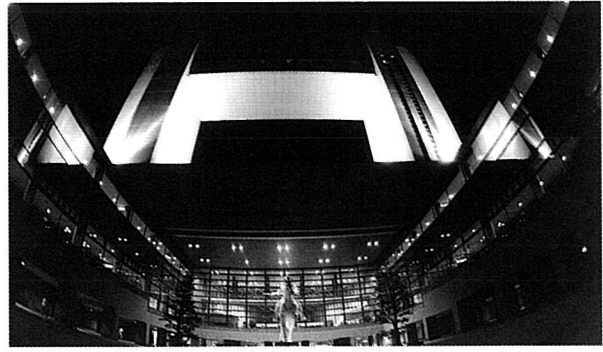
発声で宴は始まった。特別企画として駅弁や地酒を含めた東海地方の郷土料理を用意。遠方の先生方だけでなく地元からの参加者にも好評であった。宴もたけなわとなったところで、次期企画運営委員長山村晃太郎先生（旭川医大）と、来年にストックホルムで開催する国際労働衛生会議Scientific Committee代表のGunnar Höglund教授が挨拶した。その後は邦楽集団『若駒』による名古屋甚句、伊勢音頭等の演奏。奥谷先生（名古屋市名誉教授）が中締めをし、会は盛況のうちに終了した。



明日香さん



Prof. Gunnar Höglund (ICOH)



学会・研究会

第65回日本衛生学会

久 永 直 見 (産医研)

3月29-31日、藤田保健衛生大学医学部にて開催された。演題数は455題、大震災による新幹線の一部不通にもかかわらず、出席のほうも大盛況であった。メイン会場のフジタホール2000の壮麗さには目をみはった。分科会場間の行き来も便利で快適な学会であった。

関心を持った演題は多々あったが、とくに、(1)肺に沈着した重金金属の代謝的動態 (奨励賞受賞講演・国立環境研・平野)、(2)癌抑制遺伝子の不活性化の機序と遺伝子調節による癌化学予防 (奨励賞受賞講演・京府医大・酒井)、(3)松本サリン事件での被災状況 (信大・那須)、(4)DNA多型とトルエンの生物学的モニタリング (産医大・川本) などが、筆者には興味深かった。

また、斎藤次期会長 (北大) 講演も、衛生学の立場からの高次神経活動に関する研究の流れを理解するうえで役立った。

第 8 回職業性肺疾患研究会

加 藤 保 夫 (岐阜県産業保健センター)

平成 7 年 2 月 18 日 (土)、第 8 回職業性肺疾患研究会が名古屋大学大学院ゼミナール室 (参加者 26 名) にて開催された。最初に五藤雅博先生より「じん肺の合併症をめぐって—アスペルギルス症を中心に」と題して①アスペルギルスの合併頻度が高い②診断が困難 (結核との鑑別) ③治療が困難なことなどが示された。一般演題では(1)安藤達志先生より、じん肺として管理中急性増悪を起こして死亡したUIPの1例、(2)奥野元保先生からは石綿暴露歴のある円形無気肺の3症例について意義深い発表があった。次に吉野貞尚先生より「じん肺の歴史の新知見」、加藤保夫からは「岐阜県東濃地方におけるじん肺の現況」という各々興味ある報告があった。

会 員 の 異 動

新入会員

愛知 天野錦治 (アマノ歯科)、石田和人 (名市大リハビリ)、伊藤清恵 (トヨタ自動車)、上前美穂 (明治乳業)、小川裕子 (東邦ガス)、小川則子 (東邦ガス)、加藤 裕 (棚橋病院)、金山敏治 (岡崎労衛コンサルタント)、粥川久美子 (エナジーサポート)、川上多賀子 (大同メタル)、佐野 真 (猪子石内科)、白石知子 (愛知県立看護大)、杉本日出子 (豊田工機)、鈴木貞夫 (愛知医大)、高木健三 (名大医二内)、竹内 章 (竹内歯科)、中垣晴男 (愛学院大歯)、浜田静江 (明電舎)、福島久夫 (半田市医師会健康管理センター)、堀 礼子 (名古屋国税局)、丸山晋二 (東海中央病院)、吉田紀美江 (東レ)、渡邊慶子 (名大医短)

三重 岸畑安紀 (岸畑歯科)

第 8 回振動障害研究会

井奈波 良 一 (岐大・医・衛生)

平成 7 年 2 月 18 日 (土) の午後、勤労会館において出席者 15 名で振動障害研究会 (世話人、山田、岩田) が開催された。1) 「手腕振動評価の国際動向 (ISO・CEN など)、前田節雄 (近畿大・理工)」EC では振動工具の周波数加重加速度実効値 $2.5 \text{ m/s}^2 \text{ rms}$ が目標値として設定された。2) 「振動障害診断法に関する国際論議について、山田信也・榊原久孝 (名大・公衛)」昨年行われたストックホルム・ワークショップの内容が紹介された。3) 「手持機械使用の電気部品組み立て従業者の健康障害、松本忠雄 (名市大・公衛)」手持機械使用に伴う健康障害は単純なものではない。4) 「一過性聴力損失への振動と騒音の複合影響、朱善寛 (名大・公衛)」局所振動と騒音の複合暴露によって一過性聴力損失が単独暴露より増強する。

The 3rd Asia-Pacific Environmental and Occupational Dermatology Symposium (A-PEODS)

早 川 律 子 (名大分院・皮膚)

3月24日～26日にアジア各国、オーストラリア、ニュージーランド、スウェーデン、ドイツなど15カ国から166名が参加して3rd A-PEODSが名古屋国際センターで開催された。Plenary lecture 3、Sponsored symposium 2、一般演題 33の発表があった。25日はSingaporeのDr.Kohによる“Management of the workplace environment in the prevention of occupational dermatoses”とAustraliaのDr.Freemanによる“Footwear allergy”、26日には浜松医大の滝川先生による“Atopic dermatitis-Recent advance in immunological aspects of patho-physiology”のPlenary lectureがあった。

25日には“Sun damage and sun protection”、26日には“Environmental and occupational skin health”の2つのSponsored symposiumが行われた。

岐阜 高塚直能 (岐大医公衛)、西脇孝彦 (関ヶ原病院)、若尾克美 (岐阜県産業保健センター)

静岡 伊藤豊子 (静岡県農業団体健保組合)、大堀兼男 (浜松医大公衛)、田中国広 (楡歯科)、柏戸敬道 (大蔵省印刷局静岡)、佐野芳美 (静岡鉄道健保組合)、鈴木ミチ (山崎製パン)、新津谷真人 (沼津市立病院)、松尾浩昌 (浜松北病院)

退会 石垣尚男 (愛工大)、板倉義夫 (板倉医院)、中島建夫 (東亜合成)、仲田はるえ (日本ガイシ)、浜崎日出男 (日本特殊陶業)、森田興二 (森田内科小児科)

静岡 小林藤明 (日本生命静岡)、山本 勝 (大蔵省印刷局静岡)

転入 谷岡 穰 (大阪より)、牧野忠康 (日本福祉大・長野より)

転出 古谷雅秀 (NTT名古屋)、久繁哲徳 (鈴鹿医療科技大・徳島へ)

日本産業衛生学会本部年会費納入のお願い

本年度は学会役員選挙の年であります。7 月末日までに本年度（平成 7 年度）までの会費の納入が完了されない場合は、選挙権および被選挙権を失うことになりますので、ご注意ください。

なお、東海地方会評議員の定数は、会費の納入が完了した会員数により決定されます。まだ会費の納入がお済みでない先生方は、必ず 7 月末日までにお願ひ致します。

選挙日程（予定）

7 月末日 選挙権・被選挙権取得最終日
 8 月下旬 本部理事・本部評議員の定数決定
 9 月下旬 本部理事・本部評議員・地方会長の選挙
 10 月下旬 投票締切り、開票
 11 月中旬 理事長・副理事長・監事の選挙
 12 月初旬 開票
 （振り込み用紙は産業衛生学雑誌第 37 巻第 1 号に付いています）

地方理事会

第 68 回日本産業衛生学会・第 4 回企画運営委員会

日時：平成 7 年 1 月 17 日 場所：名大医鶴友会館大会議室

1. 学会の日程案（竹内）
2. 特別研修会（五藤）
3. 協賛金、展示、広告、懇親会（山田、竹内）
4. 地方会ニュース 33 号による広報活動（吉田）

平成 6 年度第 5 回理事会

日時：平成 7 年 1 月 17 日 場所：名大医鶴友会館大会議室

出席：46 名 委任状：41 名

1. 報告事項

- 1) 本部からの報告事項（島）
- 2) 事務局からの報告事項（柴田）
- 3) 平成 6 年度東海地方学会（井谷）
- 4) 関連研究会

- ①産業疲労研究会（井谷）
- ②愛知県産業医懇談会（山田）

2. 協議事項

- 1) 地方会ニュース 33 号（吉田）
- 2) 平成 7 年度東海地方会総会並びに研修会（加藤（保）、佐々木（千））
- 3) 平成 7 年度東海地方学会（伊藤）
- 4) 関連学会、研究会

第 68 回日本産業衛生学会・第 5 回企画運営委員会

日時：平成 7 年 3 月 7 日 場所：名大医鶴友会館大会議室

1. 学会の日程表最終案（竹内）
2. 特別研修会（五藤）
3. 協賛金、広告、展示（竹内）
4. 懇親会（山田）
5. 広報活動（吉田）
6. 学会の運営等（柴田）

平成 6 年度第 6 回理事会

日時：平成 7 年 3 月 7 日 場所：名大医鶴友会館大会議室

出席：43 名 委任状：43 名

1. 報告事項

- 1) 本部からの報告事項（島）
- 2) 事務局からの報告事項（柴田）
- 3) 関連研究会
- ①第 8 回職業性肺疾患研究会（加藤）
- ②第 8 回振動障害研究会（榊原）

2. 協議事項

- 1) 地方会ニュース 34 号
- 2) 平成 7 年度地方会研修会並びに研修会（加藤（保））
- 3) 平成 7 年度東海地方学会（伊藤）
- 4) 職場精神衛生研究会世話交代（森川）
- 5) 関連学会、研究会

平成 7 年度第 1 回理事会

日時：平成 7 年 5 月 2 日 場所：名大医鶴友会館大会議室

出席：25 名 委任状：52 名

1. 報告事項

- 1) 本部からの報告事項（島）
- 2) 事務局からの報告事項（柴田）

3) 第 68 回日本産業衛生学会（竹内）

2. 協議事項

- 1) 地方会ニュース 34 号（吉田）
- 2) 平成 6 年度会計・事業報告、平成 7 年度予算案、事業計画（柴田）
- 3) 東海地方会役員改選、選挙管理委員会（竹内）
- 4) 平成 7 年度東海地方会総会並びに研修会（加藤（保））
- 5) 平成 7 年度東海地方学会（伊藤）
- 6) 関連学会、研究会

これからの諸行事予定

1. 第 2 回日本産業精神保健学会

日時：平成 7 年 6 月 10 日（土） 場所：東京医科大学病院本館

2. 平成 7 年度東海地方会総会並びに研修会

日時：平成 7 年 6 月 30 日（金） 場所：岐阜市岐山会館

特別講演 1 「地域保健と産業保健の連携」

木村英道（岐阜県伊奈波保健所）

特別講演 2 「成人病予防のための食べ物の話」

金田雅代（文部省体育局）

パネルディスカッション 「私の歩んだ産業衛生」

パネリスト 衛生管理者 湯藤 勝（トヨタ自動車工場）

産業看護職 多和田千枝子（明治製菓岐阜工場）

産業看護職 青山京子（静岡県金属工業健保組合）

産業医 石川 昭（三菱化学四日市事業所）

3. 第 35 回全国産業健康管理研究協議会全国会議

日時：平成 7 年 7 月 8 日（土） 場所：松江市総合文化センター

4. 第 3 回日本職業アレルギー学会総会

日時：平成 7 年 7 月 13 日（木）～14 日（金） 場所：全共連ビル

編集後記

準備に準備を重ねた当地方会担当の第 68 回日本産業衛生学会も 4 月 26 日から 29 日まで、名古屋市の誇る国際会議場で、ほぼ完璧に成功の内に終了致しました。会員数、演題数、参加者とも大幅に多くなり、産業衛生への関心も一段と高まってきております。

特別企画も今日求められているものであったし、特別講演、メインシンポジウムも論議し尽くされて絞られたもので、大変有意義であったと思います。また地域交流集会的なものを得たものでした。

転換期を迎えた当学会の果たす役割も広い視野を必要としているように思います。より良い地方会ニュースにいくために皆様のご意見をお待ちしております。

（高柳泰世）

次回発行 平成 7 年 9 月 1 日

編集責任者 吉田 勉（聖隷健診センター）

編集委員（五十音順）

井谷 徹（名市大） 岩井 淳（全日本労働福祉協会）

大久保浩司（東芝四日市） 加藤 保夫（岐阜県産業保健センター）

鎌田 隆（本田技研浜松） 後藤 猛（労働衛生コンサルタント）

五藤 雅博（旭労災病院） 榊原 久孝（名大）

柴田 英治（名大） 清水 高子（清水ヘルスケア事務局）

高柳 泰世（本郷眼科） 谷脇 弘茂（藤田保健大）

松本 忠雄（名市大） 山田 琢之（愛知医大産業保健科学センター）